

なぜまたビザンツなのか

——ビザンツ研究の提起するもの——

日本語に、「死人に口なし」、という句があります。字引をひいてみると、「死人に無実の罪を着せることなどにいう」、と出て来る。死んでいるのをいいことにして、勝手なことをいう、というわけです。もし、死んだ本人が、小耳にはさんだら、おそらく、俺とは大分ちがう、ということになるでしょう。死人だからまあそれで収まるものの、それが、若し、生きている人だったら、事はちよいと厄介です。落語に『花色木綿』というのがあります。御存知でしょうが、空巢に入った泥棒が、家の人が帰って来たので、縁の下にかくれたところ、何でもかんでも自分のせいにされる。それを聞いて、たまらず、縁の下から出て来るといふ次第です。

渡 辺 金 一

考えてみますと、私がこれからとりあげようとするビザンツという歴史的存在に対して、どうも、この「死人に口なし」式のこと、が、ほかならぬ歴史家たちによって、平気でおこなわれているようです。たとえば、ビザンツに対してよく貼られる標語に、『カエサロバビスマス皇帝教皇主義』があります。百科辞典を見ると、皇帝が同時に教皇であるような関係、つまり、教会の最高権力が国家の手のもとにある関係につけられた標語であって、本来、四世紀以後のローマ帝国の国家教会の組織に対して用いられたが、後には、国家権力がなんらかの教会権限を行使することになっていく制度にも拡大適用された。たとえば、中世では、シャルルマーニュのフランク教会、近代では、カト

リック専制国家、領邦君主がその領邦のプロテスタント教会に最高の司教として臨む領邦国家、そして一九一七年以前のロシア国家教会のごときがそれである。この標語は、十八世紀に、そしてことに十九世紀にカトリック歴史家によって、このような意味で用いられた、とあります。つまりそれは、近代になって成立した造語です。

この造語の成立事情については、もっと調べてみる必要があると思いますが、さしあたって私の考えをのべることがゆるされたとすれば、この標語のそもその成り立ちは、中世のいわゆる叙任権闘争によって、ローマ教皇が神聖ローマ帝国の皇帝を押え込んだ結果生れた新しい関係、一〇七六年のカノッサ以後西ヨーロッパに出現した事態、そういった関係なり、事態なりの、どうも反転像くさいのです。ほかのことばを使えば、それは、四世紀以後のローマ帝国の国家・教会関係の現実に即して、そこから組み立てられた概念ではなくて、あくまでビザンツを外からながめてつくったものであって、そのさいの口は、西ヨーロッパが、自らのかちとった、政治からの宗教の自己解放という誇り高き歴史的自己了解にたつて、その裏返しとしてビザンツを見たところにあ

る。もし仮りにです、そのような《皇帝教皇主義》なるものが、現実に存在したなら、対ローマ教皇関係で何度も苦杯を飲まされている、たとえばフリードリッヒ・バルバロッサのような神聖ローマ帝国の皇帝には、なにはさておき飛びつきたいもの、願ってもないものに見えたにちがひありません。だが、万事につけ、人間、他人のことはよく見えるものです。他人の目にはうらやましいばかりにうつるものも、当の本人にとっては、他人には分らない、それ固有の問題、御家の事情というものをかかえているのが普通です。事実、『皇帝教皇主義』という標語を貼られた当のビザンツの現実も、それに他なりませんでした。

その発端に立つのは、いうまでもなく、キリスト教を公認した四世紀はじめのローマ皇帝、コンスタンティヌス大帝であります。自己の支配の正統性のイデオロギイ的根拠をもとめた大帝は、「国家にたいする神々の恩寵を確保できる唯一の手段として、間然するところのない万人のための国家祭儀を創設し、それによって社会の安寧、つまり、皇帝と国家の安全を保証しよう」(ベック)としました。そして、従来この統一祭儀への参加をかた

くなにこばみつづけてきたキリスト教を、ローマ帝国の公認宗教として宣言し、それによって祭儀の亀裂をふせごとしました。この皇帝の思惑は西方では計画どおりすすんだかに見えました。だが東方におもむいた皇帝は、問題のきびしさはじめて直面しました。東方の諸教会の間では、何が「正しい^{オル泰州・ドクサ}考え」かについての論争、つまり、教義論争が、白熱化の途上にあつたのです。各派はそれぞれ、その時々^のの自分たちの教義に一字一句まで同意しないいかなるキリスト教兄弟教会とも、一緒に礼拝もすまい、同一祭儀団体も結成すまい、という態度でありました。皇帝は、祭儀統一を是が非でも達成しなければならぬ必要上、この教義論争の土俵にひきずり込まれ、相争う諸教義の一つに軍配をあげる行司の役をつとめさせられたのです。その結果、ビザンツでは、政治的に《正しい教義^{オリッドグシ}》と判定された教義の、一定のきまり文句への信仰告白が、とりもなおさず、皇帝と国家への忠誠宣言をあらわすものとなりました。こうした、二つの歯車の咬み合いは完全であり、続く歴史のなかでいわば構造化しました。その点に、中世の西ヨーロッパ、ならびに、キリスト教世界を越えて、同時代のイスラム世

界における《正統と異端》とくらべての、ビザンツにおける類似現象の特質の根源があります。

だが、コンスタンティヌス裁定の本質は、いってみれば政治的決着にすぎません。オーソドクシー自体は、厳密な統一見解を持つてゐるわけでない。それは大変アンビヴァレントであつて、つづけば燃え上るような論争の火種をいくつもかかえています。事実、ビザンツでは、一つのオーソドクシーが他のオーソドクシーに対して反旗をひるがえし、一が他をおしのける事例に事欠かなかつた。そうしたなかで、いやそれだからこそ、オーソドクシーと皇帝から判定された教会、つまり、一たん皇帝を味方につけた教派は、こんどはこれをタテに、反対派に対し、破門と追放を繰返し、それを実効あるものとするため、皇帝から、権力の介入をもとめてやまなかつた。皇帝として、それをためらえば、こんどは、自分自身が、果して《正しい教義》の持ち主かどうかを疑われる破目になる。無力な皇帝はひきずられる。こうして、「宗教を強制するのは、宗教がおこなうことではない」(テルトゥリアヌス)は忘れ去られました。だがしかし、ビザンツ帝国は、オーソドクシーに同調しない要素を大幅

にかかえており、かれらを、兵士として、生産者として、租税納入者として、必要としました。皇帝は板ばさみになりました。つまり、「政治的に決定されたオーソドクシーは、皇帝に、国内政治路線の選択における自由の余地をきわめて狭いものにしてしまうことになった」(ベック)わけです。ですから、ビザンツでは、この政治的オーソドクシーを原理的には放棄することなしに——というの、いうまでもなく、自らの支配の正統性のイデオロギー的根拠づけとして、これにまさるものはなかったからです——、なんとかそれに距離を保ちたいとする皇帝、それに嫌悪を感じる皇帝さえ現れました。こうして見ますと、皇帝が教会に対しても、オールマイティな立場にあることを示す標語としての《皇帝教皇主義》は、この重大な側面を見落したものと、ビザンツの現実にはなじまないものであることがわかります。もしフリードリッヒ・バルバロッサがこのことを知ったら、おそらく二の足をふんだに違いありません。

* * * * *

すこし前おきが長くなりましたが、今日とりあげてみたいと思うテーマは、専制国家とか、独裁政国家とかい

われているビザンツ帝国の、国制の問題です。

よくいわれることに、古代ローマ帝国は、共和政からアウグストゥスの元首政を経て、ディオクレティアヌス・コンスタンティヌスの独裁政に変化した、というのがあります。これに続くのが、おきまりのローマ帝国没落論ですが、まあ、この誤って歴史家によって提出された死亡届はおくとして、コンスタンティヌス帝をもってビザンツ帝国を開始させるのが、これまた常識になっています。そこで、この二つを結びつけてどういうことがおこるかという、こんなひどいデカダンスをビザンツは何とか抜け出さねばならない、そうでなければ、我々にとっても、歴史研究の対象として、ビザンツをとるあげることの積極的な意味がなくなってしまう、というわけです。そこで、是が非でも、奴隸制は一掃されなければならぬし、国家強制経済はなくなければならぬし、自由農民層の展開がなければならぬし、テマ制が発足しなければならぬし、ギリシア文化圏は成立しなければならぬし、エトセトラ、エトセトラ、ということになる。こ

ういった思考のパターンを生み出す背景は色々あるでし

ようが、その一つは、歴史家が古代だとか、中世だとか
 いて、勝手に人工的な線引きをやるからでしょう。そ
 の結果、古代と中世の狭間になるのが四―六世紀という
 ことになるわけですが、この数百年というものは、果し
 てビザンツ史にとって、本当に、一刻も早く通り過ぎな
 ければならないような時代だったのであろうか。それ
 を、いわゆるビザンツ専制国家の頂点に立つ皇帝が、こ
 の時期に、どうしてきまって来るのか、という点にしば
 って、史料に即して考えてみたいというのが、今日の課
 題です。

よくいわれる言葉に三世紀の軍人皇帝というのがあり
 ます。この軍人皇帝を、軍隊によってえらばれた皇帝と
 いういささか厳密な意味に理解したうえで、コンスタン
 ティヌス帝以後の歴史をながめて見ると、この点につい
 て、事態は、三世紀とくらべて、一向変っていません。
 何よりも同時代の歴史家アウレリウス・ヴィクトールが
 証人です。曰く、「その時以後——この言葉でかれが理解
 しているのは、いうまでもなく、三世紀後半以来とい
 うことですが——、我々の時代にいたるまで——というこ
 とはアウレリウス・ヴィクトールの生きていた四世紀の

中葉まで——、軍隊ミリターリス・ポテンティアの力が増大した結果、元老院か
 ら、支配権と、皇帝選舉権とはもぎとられた。元老院自
 らが、怠惰のためにそれを望んだ結果か、それとも、紛
 争をおそれ、あるいはきらった結果かは、定かでない」と。
 と。ローマという国家を S. P. Q. R. という略字つま
 り、Senatus populusque Romanus (ローマ元老院およ
 び市民)と書くのが慣行であった頃とくらべると、大変
 な様さまがわりといわなければなりません。事実、アウレリ
 ウス・ヴィクトールが言うとおりで、コンスタンティヌ
 ス自身皇アウグストゥス帝になったのは、四頭政治体制テトラルキヤに則のつってでは
 なく、専ら、父コンスタンティウス・クロルスからう
 けついだ軍団に推されてでありましたし、コンスタンテ
 イヌスの三人の息子も、父によりまだその生前、軍隊の
 前で副帝カエサルとされ、父の死後、その遺言によってではなく、
 専ら軍隊に推されて皇アウグストゥス帝となったのでした。

続く皇帝たちについては幸い、同時代の歴史家、アミ
 アーヌス・マルケリーヌスの記述がつたわっており、そ
 れによって、皇帝がえらばれる具体的な状況を知ること
 ができます。

ユリアーヌスが三六〇年二月、冬期宿營地のルテティ

ア・パリシオールム、つまりパリで、軍隊によって皇帝に選ばれたのは、皇帝コンスタンティウス(二世)から、対ベルシア戦線に麾下軍団をひきいて救援におもむくようにとの指令をうけたときです。その模様をつたえるアミアヌス(二〇、四)によりますと、ユリアーヌスはパリを通過して東方におもむいてゆく兵士たちを激励するとともに、とくに将校たち(*proceres*)のために送別の宴会を催して、若し苦情があるなら、所定の手続きをふんで申しのべてよい、とした。かれらはこのような歓待をうけたので、別れにさいして一層心が重くなり、苛酷な運命が自分たちを、思慮ある総大将と故郷とから引き裂くのを悲しんだ。かれらはこの苦しみを懷いていつもの宿營地にもどったが、夜のとばりが降りるとともに、公然たるクーデター(正帝コンスタンティウスに対する)に出た、とあります。兵士たちは武器をたずさえて宮殿に殺到し、一斉に、「^{アフラストラス}皇帝、ユリアーヌス」と叫びました。夜明けとともににはじめて姿をあらわしたユリアーヌスは、なのおためらい、かれらをなだめますが、ついにかれらの願いに屈し、楯の上にのせられて、「^{アフラストラス}皇帝、ユリアーヌス」という歓呼の声をあびること

になりました。

対ベルシア遠征中のユリアーヌスは三六三年六月二六日、最前線で戦死しましたが、アミアヌス(二五、五)によりますと、翌日、司令官たち(*duces exercitus*)は敵軍が四周にむらがるなかで集合し、部隊長たち(*legionum principes et tunarum*)を召集して、新皇帝選出について協議しました。かれらはたがいに自分の仲間から(*ex committio suo*)候補者をたてて譲りません。やっと折合いがついて、一致して白羽の矢を立てた候補者にも、病氣と老齡を理由に断わられ、妥協として、ではせめて、ふたたびメソポタミアの地をふんで正式の皇帝を選ぶまで、とりあえず全軍をひきいてこの危機を脱してはくれまいか、という意見まで出される始末でした。だが、事が新皇帝選出という重大事項とあつては一刻の猶予もならず、決定が遅延し、気の短い連中がさわざはじめるなかで、ついに、親衛隊最高幹部(*domesticorum ordinis primus*)のヨヴィアーヌスが皇帝候補にえらばれました。アミアヌス・マルケリーヌスによれば、「急遽皇帝の装束をつけてテントからよび出されたヨヴィアーヌスは、折から退却準備を完了した兵士の列

を縫って歩いた。軍列は四マイルにもわたったため、先頭の部隊は、「皇帝ヨヴィアヌス」という歓呼の声を聞くと、一そう力をこめて自分たちも叫びをあげたが、そのさい一字違いのため、誤ってユリアヌスが再起したとばかり思いこんで、よろこびにどよめいた。だが、長身のヨヴィアヌスが体をかがめて近づいて来るのを見ると、かれらは事の真相を知って、皆涙を流し、悲嘆にくれた。こう書いたのち、アミアヌスは、「若し人あって、最もさしせまった事態で下されたこの決定を、急ぎ過ぎたものときめつけるなら、それは、暴風で海が荒れ狂っている際、老練な船長を失って次善の被災者に舵を托すことを批難する船員の轍を踏むものだ」と自分の意見をのべています。

このヨヴィアヌスは、ペルシアと講和条約を結んでコンスタンティノープルへ帰る途中、三六四年二月十七日に急死しました。アミアヌス(二六、一)によりまずと、文武の高官たち(*potestatum civilium militiae-que rectores*)は早速ニカイアの宿営地で、後継者候補の選定の協議に入りました。このような選考会議でよくみられるように、具体的な人物を頭におきながらその者

の名は出さずに、何人かの候補者がありましたが、いずれも問題があって消え、さいごにヴァレンティニアヌスの名が浮上し、そこで意見の一致をみました。当時は後衛部隊長としてアンカラに残されていたため、早速使者が派遣されて、ニカイアによばれました。その間十日間、ローマ帝国は空位でした。その間ヴァレンティニアヌスをついだパンノニア出身のかれの同郷の高官たちは、ニカイアに居合せている別の人物が兵士たちによって皇帝に選ばれはしないと、神経をとがせました。到着したヴァレンティニアヌスは自分に下された使命の大きさのあまり、その翌日一ぱい人と口もきかなければ、表にも出ませんでした。その日の晩、いかなる権力者も、そしてまた、転覆計画をたくらんでいる疑いのあるいかなる者も、明日外出してはならないという禁足令が出された上で、いよいよヴァレンティニアヌスの皇帝選出日をむかえました。参集した全ローマ軍の前に姿をあらわしたヴァレンティニアヌスは、設置された演説台にのぼり、型のごとく、全員から「皇帝、ヴァレンティニアヌス」の歓呼の声をあびました。だが続いて、演説をはじめようとして、腕をマントからさ

し出したとき、急に無気味なざわめきが聞えはじめ、兵士たちの騒ぎは頂点にたつして、全員が、「いま一人の皇帝」(imperator alter)を立てるよう要求しました。

アミアヌスはこれを説明して、このデモンストレーションは、買収された何人かの連中の仕業ではなく、最近の事例(つまり、ユリアヌス、ヨヴィアヌスの例)に徴して、最高権力者の運命のもろさ(fragilitas sublimium fortunarum)を心配したためである、としています。だがヴァレンティニアヌスは、支配者としての確固たる自覚に基いて、何人かの兵士を煽動者として叱責したあと、演説に入り、「ローマ帝国の統治者を選ぶまで(nondum electo imperii formatore)諸君たちの手に托されていた使命を、諸君たちは立派に果した。諸君たちが選んだのは、諸君たちも知るように、若い頃から男盛りの現在まで、輝かしい、非の打ちどころのない生活をおくってきた男だ。だからこの私を信頼して呉れ。諸君たちの望んでいる共同皇帝に私は異存はないけれども、ただ、それをきめるに当っては、慎重でなければならぬ。今は冬期陣営でゆっくり休養をとって呉れ。そして、私の皇帝就任の祝儀を受けて呉れ」と、一つの

野次の付け入るすきも与えずに、演説を述べ終りました。こうしてヴァレンティニアヌスは危機を一まず乗り切りました。

一たん時間をかせいだかれは、つづいて側近の実力者たちから、共同皇帝の人選について意見を徴し、かれらに、候補となるべき人物の名前をあげさせながら、意中の人物が弟のヴァレンスであることを誰にももらさずに、ニコメディアでかれをまず高級武官に昇進させ、つづいて三月二十八日、コンスタンティノブル城外の、おそらくヘブドモン練兵場で、かれを共同皇帝(正確には同候補者)として軍隊に推薦し、もはや誰一人反対する者もないままに、万場一致で、軍隊から承認をかちとりました(アミアヌス 二六、四)。

なおヴァレンティニアヌスは、数年後の三六七年にはアミアンで息子のグラティアヌスを、同じく軍隊の承認にもとづいて共同皇帝にしました。実はそれに先立って、ヴァレンティニアヌスは急病にかかり、明日とも知れぬ命とみえました。そこで側近の間では、後継者に誰になるかについて、いろいろな思惑が飛び交いましたが、間もなく同帝は薬石効あってふたたび元気になりました。

した。そこでかれはこの体験にかんがみ、やっと十歳になるかならないかという息子のグラティアヌスを共同皇帝に据えようと決心したわけです。この間の事情を伝えるアミアヌスによりますと(二七、六)、ヴァレンティニアヌスは予め兵士たちの間で充分根まわしたうえで(et patris omnibus miteque firmato, ut animis id acciperet promptus)アミアンの広場にローマ軍

団を集め、しつらえられた演説台に登り、多数の高官にとりまかれ、息子の手を右手で握って真中につれてゆき、兵士たちに共同皇帝(候補)として推薦する演説をおこないました。兵士たちは皇帝のこの提案を熱狂的に行うけいれ、グラティアヌスを「皇帝として宣言する」(declarant Augustum)のですが、注目すべきは、この演説中でヴァレンティニアヌスが兵士たちに向って、「どうか冷静な気持ちで私の願いを聞き入れてほしい」(accipite igitur, quæso, placidis mentibus, ... desiderium nostrum)と切り出し、グラティアヌスを就任させようとする共同皇帝のポストを、「共同の軍事奉仕」(commilitum)つまり自分が兵士と一緒にこなう軍事奉仕とよび、兵士へのよびかけの言葉として、vestrae

maiestatis voluntas つまり、国家元首へのよびかけの言葉を使っている点です。余談になりますが、先日テレビを見ていましたら、迎賓館のレセプションでのテンプル・スピーチで、フランス大統領が日本の天皇によびかけるさい、"votre majesté impériale"という言葉を使っていました、あれです。

なおこのヴァレンティニアヌスは三七五年十一月十七日、ドナウ中流のブリゲティオで急死いたしますが、その直後、軍隊はアクインクム、つまり今日のブタペストで、アミアヌスの言葉をかりれば、「グラティアヌスが快く思わないだろうことは百も承知の上で」(三〇、一〇 Gratianum indigne latum existimantes)つまり、グラティアヌスの共同皇帝推薦権を無視して、いまだ四歳のかれの弟、ヴァレンティニアヌス二世を皇帝にえらびました。ただこの時は別に何もおこらず、平穩裡に時がすぎて、グラティアヌスはやがて弟のヴァレンティニアヌスの教育をひきうけました。

アミアヌスの伝える、以上の四世紀後半の諸事例に徴して、ローマ皇帝はこの頃、三世紀後半と同じく、依然軍隊によって選ばれた皇帝であり、選出の模様はつき

のようであつたこと、すなわち、

一、ローマ皇帝選出は、首都をはなれた属州の軍隊駐屯地でおこなわれたこと、

二、そのさい、現在軍事政權でよくみられるように、将校団の間で（ヴァレンティニアヌス選出のときは、皇帝とともに移動していた文官も加わって）、話しあいにより、候補者が一人にしばられたこと、

三、この候補者は、軍隊の歓呼の声をあびて、はじめて皇帝として正式に承認されたこと、
がわかります。

しかも、ヴァレンティニアヌス選出の場合が示すように、軍隊はけつして、高級武官たちの意のままになる道具として、後者が予備選挙でえらんだ候補者を形式的に追認する丈のロボット機関ではなく、反対に、同帝がグラティアヌスを共同皇帝として軍隊に推薦したときの言葉が示すように、皇帝自身が、軍隊を、たとい主権者ならずとも、少くとも、皇帝選挙権を有する者とはつきり意識していました。

なお、おなじアミアヌスが、皇帝選挙の茶番劇として伝えている三六五年のプロコピウスの場合は、たしか

に属州ではなく、コンスタンティノープルが舞台でした。

それは、あくどい利権追求をおこなう皇帝ヴァレンス一族に対する一般的反感を背景に、小アジアからトラキアに移動するためたまたまコンスタンティノープルに駐屯中の軍隊にたいし、ユリアーヌスの縁者プロコピウスがはたらきかけ、かれらを買収しておこした革命でして、軍隊による皇帝選出の例にもれませんでした。アミアヌスによりますと（二六、六）、コンスタンティノープルのアナスタシア浴場に宿営地をはっている軍隊によって皇帝にえらばれたあと、プロコピウスはつづいて、集った市民に話しかけるため演説台にのぼったのはよかったです、だまりこくって無表情の市民にたいし言葉が出ず、やるときえ入るようなかぼそい、とどこおりがちな声で、自分はユリアーヌスの親戚だとのべ、さくらがそれに調子をあわせてバチバチとまばらな拍手を送り、これをおいかけて大衆からやっと、皇帝として歓呼の声を浴びました。プロコピウスはつづいて急ぎ足でコンスタンティノープル市会、つまり、第二のローマの元老院にかけつけますが（*petit curiam rapim*）、元老院議員はすでに裳抜けの殻、泥足で宮殿にかけこんだというこ

とです。

アミアヌス・マルケリーヌスの叙述は、アドリアノープルでの三七八年のヴァレンス帝戦死をもって終っており、その後の諸皇帝については私たちはこのような同時代史料を持ち合せていません。判明していること、ないし推測できることは、テオドシウス一世がシルミウム、いまのユーゴスラヴィアのミトロヴィツァの営舎地で三七九年一月十九日に皇帝にえらばれたこと、このテオドシウス一世は三九三年に息子のアルカディウスおよびホノリウスを、またアルカディウスは四〇二年に息子のテオドシウス二世を、いずれもコンスタンティノープル城外のヘブドモン練兵場(前述)でアウグストゥスの位につけており、場所柄からみて、軍隊が大きな役割を演じたと思われること、テオドシウス二世に続いたマルキアヌスの場合には、前者に子供がないため、その妹のブルケリアとの結婚が、重要な要素であったろうと推測されること、以上にすぎません。これは、続く五世紀後半から六世紀はじめの諸皇帝のうち、レオン一世、アナスタシオス、ユスティノス一世の三皇帝の選出事情について私たちが詳しい情報を持ち合せているのと、好対照

をなしています。

* * * * *

情報提供者は、十世紀のビザンツ皇帝コンスタンティノス七世ボルフェロゲネトスです。有職故実(うしよくこじつ)に異常なまでに興味をもったこの皇帝の編纂物の一つに、『宮廷儀式の書』があります。かれはここで、コンスタンティノープルでさまざまな機会にくりひろげられる宮廷セレモニーを、ベダンティックなまでに克明にノットしましたが、そのさい持ち前の骨董趣味から、同時代の儀式を記載するにとどまらず、何世紀も前の儀式のプロトコルを、何の加筆、訂正も加えずに、後生大事に収録したのです。そのおかげで、五世紀後半から六世紀はじめにかけてのさきの三皇帝の選出の模様について、私たちは貴重な「ヴィデオ・テープ」を持つことができたわけです。

レオンが四五七年二月七日皇帝に選ばれたのは、マルキアヌスが死去し、西方でも帝位が空白の時でした。もちろん、レオンが皇帝に選ばれるさい、陰の実力者アスバルの存在を無視できませんが、ここでの問題は、皇帝選出がいかなる順序で、いかなるグループの参加のもとに進行したかという、その国制史的側面です。コンス

タンティノス七世の伝える同時代のプロトコールによれば、それは次のような順序でおこなわれました。

まず、元老院が予備選挙で候補をレオンにしばらくしました。

会場は、コンスタンティノープル城外のヘブドモン練兵場でした。

レオンに対する歓呼の声がわき上り、「国家がレオンを皇帝として必要とする」(Μέγιστα παρὰ τὸ πρῶτον τὸ δημόσιον αἰτεῖ) という叫びが、宮廷人 (παύτριον)、軍隊、元老院 (議員)、市民の四グループからおこりました。なお、コンスタンティノープルの元老院の構成は、時代の経過とともに、ますます現職の国家高官から構成されるようになる一方、宮廷の枢密院と相覆うようになりましたから、上記の四グループは、元老院、軍隊、市民の三グループにまとめてかまわないでしょう。なお歓呼のことばとして、「世界はレオンを待つ。軍隊はレオンをうけいれる」(Μέγιστα ὁ κόσμος ἀναμένει Μέγιστα ὁ στρατός ἐκδέχεται) も叫ばれますが、これは練兵場守護神マルスに向っての叫びだといわれています。

これに応えてレオンが演説台にのぼりますと、全員が、

「皇帝レオン、あなたは勝利者」(Μέγαν ἀνέγερτε, ἐν νίκῃ) という歓呼の声をあげます。これは、「勝利の歓呼」、とよばれるもので、古来、ローマ皇帝にたいするよびかけのきまり文句になっていました。この結果レオンは正式に皇帝としてうけいれられたことになります。

これで皇帝選出という国事行為の主幹部分は完了しますが、レオンは衣裳をかえてふたたび会場に姿をあらわし、全員から、祝賀の歓呼をうけます。これに答えてレオンは、リベリオスという役人の口を通じて、兵士に向って、「勇敢なる兵士らよ。神が、そして、諸君らの選挙が、幸運にもこの私をローマ帝国の皇帝とした」と述べ、全員から、「皇帝レオン、あなたは勝利者」の歓呼をふたたび浴びます。レオンは答えて、「諸君たちがこれから持つであろうところの皇帝は、いままで常に諸君たちとともに遠征して、あらゆる艱難辛苦(かんなんくし)に耐えることを学んだが、これからは諸君たちの戦友として、苦勞を諸君たちとわかちあうであろう、等々」を、同じくラウドスピーカーのリベリオスを通じて述べ、兵士たちに祝儀を約束します。プロトコールは続いてレオンが一人コンスタンティノープル城内にもどり、諸教会を巡

行したあと、宮中宴を開く次第を記すのです。

皇帝ゾエノンが死去し、続いてアナスタシオスが四九一年四月十一日皇帝にえらばれたときの模様はつぎのようでした。

会場はもはやヘブドモン練兵場ではなく、コンスタンティノープルのまちのどまんなか、大宮殿と背中あわせの馬車競技場^{ヒッポドロモス}でした。これは、三世紀はじめセプティミウス・セヴェールス帝が着工し、百年後にコンスタンティヌス大帝が完成した施設で、五万人もの観客収容能力をもっていたといわれています。とすると後樂園球場のそれに匹敵するわけでしょうか。

ゾエノン死去の日の晩、高官 (*hypomene*)——つまりさきのレオンのときの宮廷人に当ります——と元老院は宮殿に、いうまでもなく、候補者しぼりのため集まりました。

明けて四月十日、市民が馬車競技場のスタンドをうずめつくし、儀仗兵的な性格の宮廷護衛隊の兵士たちが周囲をかためるなかで、故ゾエノン帝の後アリアドネーが、随行の高官たちをしたがえてローヤル・ボックスに姿をあらわします。市民からは、「皇后アリアドネー、あなたは勝利者」、という例の歓呼が一斉におこり、アリアドネ

ーに対する祝賀の言葉が叫ばれ、それに続いて、「正しい^{ドツクセス}教義の皇帝をこの世に」、という要求があります。アリアドネーは例のラウドスピーカを通じて、市民の要求は当然の権利だとして、それを認めるのですが、注目すべきは、アリアドネーがそのさいに述べる言葉です。それは、「高潔な精神のあなた方は、あなた方の *ecclesiastics*〔つまり、ラテン語でいえば、さきのヴァレンティニアヌス一世の兵士に対するよびかけのことばとしてアミアヌスにみられた、あの *voluntas maiestatis vestrae*〕にふさわしく今回もまたいつものように行動し、良き秩序を維持した、となっています。歴史家ならここで、二重の意味ではっとしなければいけないところでしよう。それは、まず第一は、今の場合、この言葉が、プロトコールに収められている以上、そのとおり実際に述べられたからであり、第二に、アリアドネーに代って市民に答える役のリベリオスは、たとい皇帝選出の儀式のために予め準備された問答手引きの如きを手許に持ち合せていないとしても、専門職の皇帝スポークスマンである以上、相手をどういうタイトルでよぶべきか充分心得ており、したがって、問題の表現は、団交のアドリブ

答弁で飛び出すようなものとはわけがちがう、大変な重みをもったものと受けとるべきではないか、と思うからです。なおこの重要な言葉は、アリアドネーが市民へよびかけるさい、続いて何回も出て来ます。

こうして、新皇帝選出をもとめる市民に対し、ゴー・サインを出したアリアドネーは、再び、「アリアドネー、あなたは勝利者」、の歓呼を浴びたあと、それをうけて市民に対しつぎのように、述べます。実はあなた方の要求に先立って自分は、高官および元老院に対し、勇敢な軍人たち（とはいってもこれは、*magistri militum* のような高級武官を指し、ローヤル・ボックスのまわりをかためているさきの護衛隊兵士とは別の存在です。すなわち、高級武官は皇帝選出にさいして、元老院と一括して扱われる存在となり、したがって、軍隊を代表するのは、競技場では、このローヤル・ボックス附近の宮廷護衛隊兵士ということになります）の意見を徴し、また、首都の主教の立ち合いの上で、皇帝にふさわしい人物を選び出すよう指示済みだ、いづれにせよ、いまはまずヅェノンの葬儀を済ませなければならない、それに、人物選びには、せいて、あとから後悔するようなことがあっては

いけない、と。そしてまたも、勝利の歓呼を浴びます。頃は四月、コンスタンティノープルは復活祭を迎えようとしています。ボスフォロス海峡をふきぬけて来る風もなおつめたいながら、すでに春の息吹きが感ぜられます。市民は、「世界に復活祭の良き日の来らんことを」、とうたい、アリアドネーに祝賀の言葉を送ったのち、突如、悪徳市長の罷免要求をきりだします。その処理如何では、来るべき皇帝選挙に、自分たちはどう出るかわかりませんよ、という意志表示でしょう。だがアリアドネー側もさる者、その件はすでに処理済みだとし、選考した新市長候補の名を公表し、市民の了解を得ます。そしてかれらに向って、秩序を守るように、所定の手続きによってすすめている皇帝候補者しぼりの結果を待つように、といったのこして、退場します。

さて元老院における候補者しぼりですが、それは難航します。そこで、アリアドネー一任の動議が出て一決、この委託をうけたアリアドネーは文官アナスタシオスに白羽の矢を立て、高官連も満足します。アナスタシオス邸にはこの旨を伝える使者が派遣されて、かれは宮廷に呼び出され、そこにとめおかれます。その間ヅェノンの

葬儀がおこなわれます。

明けて四月十一日、まず宮殿に元老院が招集され、アナスタシオスはそので国家に対する忠誠誓約をおこなったあと、いよいよ馬車競技場に入場します。アナスタシオスはまず皇帝としての装束をつけないままローヤル・ボックスに入り、スタンドの市民から祝賀され楯の上のって一人の兵士から首飾りを頭につけてもらい、兵士と市民代表 (*syndecus*) から祝賀をうけます。そして、一たん宮殿にもどって正装してふたたびローヤル・ボックスに立ち、市民にあいさつします。そして全市民から「皇帝よ」 (*Auguste, vegete*) とあいさつをうけます。アナスタシオスはつづいて祝儀を約束したあと、兵士と市民にたいし、つぎのように演説します。私の意に反し、また、まぬかれたいと思ったに拘らず、身分の高い側近と相談した皇后アリアドネー、および、元老院の選挙、兵士と市民との歓呼が、私をローマ帝国の皇帝とした、と。そして「皇帝アナスタシオス、あなたは勝利者」の歓呼を浴びるのです。ローヤル・ボックスとスタンドとの間でおさらば何回か応酬が繰り返されたあと、「皇帝アナスタシオス、あなたは勝利者。皇后アリアド

ネー、あなたは勝利者。神は私たちにあなた方を与え給うた。神はあなた方を護り給うであろう」、に答えて、アナスタシオスは、「神はあなた方とともにあれ」、と述べて馬車競技場から退場します。そして皇帝は諸教会を訪れ、宮殿に戻って新市長を任命し、ミサを催し、高官たちのために宴会を開いた、という記事でアナスタシオスの皇帝就任のプロトコールは終わっています。

アナスタシオス帝が死去し、続いてユスティノスが皇帝として選ばれるときには、先帝の子供は勿論のこと、アナスタシオス選出のさいのアリアドネーに当る先帝の^{あと}後も、もはや存在していません。国制史的観点からみれば、さきのレオンの場合と全く同一であります。ただ続く候補選考劇の展開の過程からみて、ユスティノスの場合には、アスバルのような、ずばぬけた黒幕はどうも存在しなかったようです。

五一八年七月九日夜アナスタシオスが死去すると、宮廷護衛の任務をもつ、*magister* 職のケレル、ならびに、*comes excubitorum* 職のユスティノスが夜中を官廷によび出され、両者はそれぞれ麾下の宮廷護衛隊を召集して警備につかれました。

翌日、市民は馬車競技場集って、「元老院よ、あなたは勝利者。軍隊に、神よりの皇帝を」という歓呼の声をあげました。ここに示されているように、今や元老院が、皇帝空位に際して国家の最高権力を代表する機関であるのにくらべ、軍隊はもはや、元老院並みの「勝利の歓呼」を受けるような国制上の機関ではなく、換言すれば、かつてヴァレンティニアヌスから *voluntas maiestatis vestrae* とよびかけられたような存在ではなく、神の嘉する皇帝を持つことで満足しなければならぬ存在となっていました。なお、すぐ統一してお判りのように、競技場には、皇帝選出における軍隊の代表として、ローヤル・ボックス附近の宮廷護衛兵士が居り、いまの市民の歓呼には、当然かれらも加わっているわけですが、プロトコールではもはやかれらは、市民とは区別された、歓呼をあげる独立の単位としては現われて来ません。

一方、宮殿内の大広間、「十九の長椅子の間」前の柱廊玄関では、すべての高官、それに総主教も加わって、候補者しぼりがはじまりましたが、一向に埒があきません。こうしていたずらに時が流れるなかで、さきのケレルは馬車競技場のローヤル・ボックス附近に陣取ってい

る宮廷護衛隊兵士にむかって、もし諸君らがイニシアティブをとろうとするなら、一致して諸君らの候補を押さなければならぬ。さもなくば、他の者たちに追隨しなければならぬだろう、と述べました。つまりケレルは、元老院の候補しぼりがもたつくなかで、もし兵士が皇帝選出におけるかつての主導性を取り戻そうとするなら、今をおいてない、ということを示唆したものと思われる。だが、兵士が皇帝候補指名でイニシアティブをとろうとするすべての試みは水泡に帰しました。最初の候補者は市民の一部（「青組」）から投石されてひき下りました。第二の候補者は、同じ兵士仲間からひきずりおろされ、危く一命をおとすところでした。

だがしかし、その間市民の方は、辛抱よく元老院の決定を待ったようです。そしてついに元老院は白羽の矢を、さきの宮廷護衛隊長ユスティノスに立てました。かれは早速馬車競技場に入場し、途中で反対する一人の兵士におそいかかられる一幕もありましたが、結局、元老院、兵士、市民代表 (*Optimates*) のすべてが、この候補に異存ありません。いつもはいがみあっている仲の、競技場ファン・クラブ、「青組」と「緑組」も今日は一

致してユスティノスを迎えます。かれは総主教および高官をしたがえてローヤル・ボックスに入り、一兵士から首飾りを頭につけてもらったあと、兵士たちが楯をさしあげてつくった傘の許で皇帝の装束をつけ、総主教から冠をおかれて、ふたたびローヤル・ボックスに姿をあらわします。そして、競技場に集ったすべての者から、「皇帝ユスティノス、あなたは勝利者」、の歓呼をあげます。これにたいしてユスティノスはこうあいさつします。「全能なる神の御旨と、あなたがたの一致した選挙で、この私は皇帝の位につく。そして、天から恩寵が下されるよう祈願する」、と。これに対して、「皇帝ユスティノス、あなたは勝利者」、の歓呼が全員からおこり、このやりとりはもう一度繰り返されます。続いて皇帝は祝儀を約束し、これに答えて、すべての者が、「神はキリスト教徒皇帝を護り給うように。全世界が同じ願い」と叫び、さいごに皇帝が、「神はあなた方とともにあれ」となえます。そして、アナスタシオスの時と同じ儀式が続いた、という注記でユスティノスの皇帝選出に関するプロトコールは終わっています。

* * * * *

以上私たちは、五世紀後半から六世紀はじめにかけておこなわれた、レオン、アナスタシオス、ユスティノスの三人の皇帝選出の模様を、国制史的観点から観察して来ましたが、その結果を、さきの四世紀後半の場合と比べながら、まとめてみたいと思います。

なによりもまず指摘しなければならない点は、おしなべてこれら三皇帝の選出が、いずれも、元老院、軍隊、市民というコンスタントな三要素の参加のもとで実現されているという点です。これは、皇帝選出劇が軍隊のひとり舞台だった百年前とくらべて、大変な変わり様です。それを、これら三要素のそれぞれが果たした役割に則して、まとめてみると次のようになるでしょう。

まず元老院についていえば、四世紀後半に将校団がおこなっていた予備選挙、つまり皇帝候補者しぼりのあの役割は、今や、一貫して、元老院がひきうけるところとなりました。そのさい見逃してはならないさらに重要な点は、元老院のこの予備選挙が、アナスタシオスの皇帝演説に示されるように、元老院の権利として、皇帝自身によって公式に確認されている点です。そのうえ、ユスティノスの選出に先立つ皇帝空位のとき元老院が、「元

老院よ、あなたは勝利者」という歓呼の声を浴びたことから明らかなように、元老院は空位時に国家の最高權力を代表する機関となりました。

軍隊はどうでしょうか。レオンが皇帝に選ばれた場所がなお練兵場であり、また皇帝として選ばれたあと、レオンがおこなった演説が、軍隊によって選ばれた四世紀後半の皇帝をなお彷彿させるにせよ、軍隊はすでに、元老院、市民と並んで皇帝選出に参加する一要素にすぎなくなっていました。しかもアナスタシオス選出のさいのアリアドネーの演説にみられるように、高級武官は候補者しほりにさいして、元老院から意見を徴される存在になってしまい、こうして結局は元老院に吸収される一方、馬車競技場で軍隊をそれとして代表するのは、ローヤル・ボックスの附近をかためる儀仗兵的な性格の宮廷護衛兵士の一群にすぎなくなりました。皇帝選出におけるかつての主導性をふたたび自分たちの手に取り戻そうとするかれらの企ても、時代の流れに逆らおうとするアナクロニズムなエピソードにすぎない結果となったことは、ユスティノスの皇帝選出のさいに私たちがみたとおりであります。

皇帝選出にさいして、馬車競技場に参集した人々の圧倒的多数は、今や市民でありました。そのかれらは、アナスタシオス選出のさいのアリアドネーの市民に対する言葉、「あなた方の *καθολικός ἡ μαίεστας* にやわしく、云々」が示すように、かれらは、国家権力の代表から、固有の権利をもった存在として認められたのです。だがそのかれらは、ユスティノス選出にあたって、独自の候補を立てようとする兵士たちに反感を懷き、かれらに同調するどころか、反対に、元老院の予備選挙の結果を辛抱よく待ちました。つまり、市民は自分たちの権利の限界を心得ていた。換言すれば、アナスタシオスの皇帝就任演説にみられるように、皇帝候補の予備選挙はあくまでも元老院の仕事であり、自分たちの仕事は、元老院から提示された候補を、兵士とともに、歓呼の声で正式に皇帝として承認することだ、というけじめをわきまえていた、と言うことができるでしょう。

これを要するに、四世紀後半にみられた、軍隊による皇帝選出の独占状態はその後二百年の経過のうちに打破され、元老院、市民、軍隊の三者による皇帝選出にとって代られ、しかも重要な点は、ユスティノスの皇帝就任

演説のことは、「あなた方の一致した選挙で、この私は皇帝の位につく」、に示されるように、この三者による皇帝選出はばらばらではなく、あくまでワンセットをなし、かかるものとして理解されていたということです。

この変化の背景には、丁度この時期に、新首都コンスタンティノープルの、典型的な地中海的大都会への発展（たとえば、その人口は、三三〇年の開都式後七〇年間に、四倍にも伸び、四百年初頭には二十万に達したといわれています）がみられ、皇帝も属州の軍隊宿営地をすてて最終的にここを常住の地とするなど、さまざまな新事態を考慮しなければなりません、それは本日の問題ではありません。ここでしなければならぬのは、皇帝選出にみられた変化というものの国制史的な意味づけでしょう。

まず第一は、元首政以来のローマ帝国の歴史の文脈のなかにおいて考えたとき、五世紀中葉以後皇帝選出にみられるのは、なんら国制上の新事態ではないということです。それは、四世紀の中葉にアウレリウス・ヴィクトールも感じていたところの、軍隊が元老院から皇帝選挙権を奪っていたあのローマ国制史上のアブノーマルな状

態が正常化し、ローマ帝国は S. P. Q. R. の時代に再び復帰したことを意味するにすぎません。五世紀の過程でローマ帝国は、現代歴史家の死亡診断書を尻目に、国制史的には、元首政の原点までたちもどったのです。

第二は、続く六世紀いごのローマ帝国の国制にとって、元老院、市民、軍隊の三者による皇帝選出がもった意味に關してです。結論だけ述べれば、私たちが五世紀中葉から六世紀はじめにかけての三人の皇帝について確認した、これら三者による皇帝選出という国事行為は、続くビザンツ国制史のなかでコンセンサスと化し、これら三者ワンセットの選挙で、皇帝というものがきまるのであり、したがって、これら三者が合法的な皇帝選挙権者だという意識が定着していった、ということです。専制支配者である皇帝が、憲法——といっても、書かれざる——上、自らのうちに、自らが皇帝たることの根拠をもち得ず（血統カリスマの欠如）、この点、元老院、市民、軍隊による承認に依拠せざるを得ないというこの關係を無視してはまず理解できない数多くの現象に、ビザンツ国制史は満ちています。たとえば、ビザンツ千年の歴史のなかで、八十八人の実際に統治行為をおこなった皇帝のうち、

四十三人を下廻らない者が革命で帝位をおわれ、そのうち三〇人は非業の最後をとげたこと、それにもかかわらず、国家の同一性、連続性が毫も損われなかったこと、などは、他の諸要素と並んで、いまのべた点も、大いに関係しております。こう考えて来ると、私は、さきほどみたあのようなコンセンサスをつくりあげたビザンツ人にたいし、尊敬ではないにせよ、ある種のこわさを感じずにはいられません。そのかれらにむかって、私たちが「死人に口なし」式のことでも言おうものなら、かれら

から、「カッコイイことを言うあなた方御自身はどうなんでしょうか」、とでも逆に問われそうです。

あとがき 本稿は、一九八二年五月十五日、青山学院大学における日本西洋史学会第三二回大会の公開講演として発表されたものである。なお、『宮廷儀式の書』の引用箇所は、*De caerimoniis aulae byz. I* 410—430 (Bonn) である。

(一橋大学教授)